國學院大學学術情報リポジトリ

# 渓百年『論語余師』再考：『論語集注』との関係を中心として



| メタデータ | 言語: Japanese<br>出版者:<br>公開日: 2023-02-05<br>キーワード (Ja):<br>キーワード (En):<br>作成者: 青木, 洋司<br>メールアドレス:<br>所属: |
| --- | --- |
| URL | https://doi.org/10.57529/00000900 |

# 渓百年『論語余師』再考

## ――『論語集注』との関係を中心として――

青木洋司

### 一、前言

江戸期において『論語』訓蒙書は数多く作成された。代表的な訓蒙書としては毛利貞斎『重改論語集註俚諺鈔』、中村惕斎『論語示蒙句解』、渓百年『論語余師』などが知られる。[1]

これらの訓蒙書は江戸期だけではなく、明治期にも読者を得ている。『重改論語集註俚諺鈔』は『漢文叢書』第一冊（博文館、一九一三）に、『論語示蒙句解』は『漢籍國字解全書』第二冊（早稲田大学出版部、一九二六）に、渓百年『論語余師』は『論語経典余師　宇宙無上大宝　附・大学中庸』（日吉丸書房、一九〇九）、『論語国字解』（宝文館、一九一〇）として出版されている。明治期にも及ぶ『論語』訓蒙書の強い影響力が見えよう。

『経典余師』は天明六年（一七八六）板行の『経典余師　四書之部』より、天保十四年（一八四三）板行の『経典余師　近思録之部』に至る全十部の著作である。『論語』に関連するのは「四書之部」に収める『論語余師』、『経典余師　四書序之部』（寛政四年・一七九年板行）に収める「論語序説」関連部分である。

これまでの『経典余師　四書之部』の研究において、その解釈は、平易な解説、朱子学的な解釈、古義学との関係など種々に論じられているが、未解明の部分は多い。

そこで本稿では、江戸期『論語』訓蒙書の一端として、『論語余師』における『論語』解釈を『論語集注』との関係を中心として検討する。底本は天明六年本『経典余師　四書之部』所収『論語余師』を用いた。

また、本稿は、國學院大學大学院特定課題研究「江戸期

『論語』訓蒙書の研究」及び日本学術振興会、科学研究費、基礎研究（C）領域番号19K00061「江戸期『論語』訓蒙書の基礎的研究」の研究成果の一部である。

## 二、先行研究について

『経典余師』（以下、適宜、『余師』と略す）の著者、渓百年は、本姓は河田、上杉謙信に仕えた河田長親の後裔とされる。宝暦四年（一七五四）生、天保二年（一八三一）卒。讃岐出身の儒者、菊池黄山に学び、江戸、京都、大坂に遊学した人物である。

百年については、一連の『経典余師』が版を重ね、流行したことが知られる。鈴木俊幸氏は『経典余師』を「素読独習を可能とする画期的」な著作であり、「自学する読者用」とする。[2]『余師』には影印版が出ており、そのなかで小泉吉永氏は以下のようにいう。[3]

庶民を巻き込む漢籍独学ブームをもたらした点、自学自習に適した学習参考書のスタイルを生み出した点で、近世庶民文化に重大な影響を及ぼしており、儒教経典を庶民がどのように理解し、受容していったかを具体的に探る好史料であろう。

鈴木氏と同様の視点で『余師』を「自学自習に適」するという。ただし、小泉氏のいう「漢籍独学ブーム」「学習参考書」の実態は慎重に検討する必要もある。

右のように『余師』は「自学自習」のテキストとみなされ、その流行などが論じられる。その一方で、『経典余師四書之部』（以下、適宜、「四書之部」と略す）の解釈には様々な議論が存在する。

明治期の『論語経典余師　宇宙無上大宝　附・大学中庸』中の「校訂論語経典余師附言」は「此書の註解は総て朱註に拠りたり」とする。同じく『論語国字解』中「汎例」は「宋の晦庵朱先生の集註を本とすと雖も、往々雑ふるに、本邦大儒、林羅山、熊沢蕃山、木下順庵、伊藤仁斎父子、荻生徂徠等諸家の説を以てしたり。殊に往々、渓氏自家の見だし」とする。

明治期では、朱熹の注釈に拠るとするもの、朱熹を本とし、江戸期の儒者、著者渓百年の解釈を交えるとするものが存在し、見解は分かれている。

これは近年でも同様である。高井規行氏は「四書之部」中の『大学余師』を検討し、「朱子の解釈に基づき、日本的解釈や陽明学的解釈が取り入られた」とする。[5]金培懿氏は古義学と水戸学の影響を論じる。[6]土田健次郎氏は「漢籍

学習の機会を得難い者のために仮名で書かれた自習書」であり、「『四書集注』にそっている」とする。(7)

右のように、明治期以来、朱熹の注釈（『四書章句集注』）に拠るとするもの、江戸期の儒者を交えるとするもの、古義学、陽明学の影響と種々に論じられている。

以下、「四書之部」の理解に資する「凡例附言」「大成至聖文宣皇帝孔夫子」を検討したい。

## 三、「凡例附言」について

「四書之部」は冒頭に「凡例附言」が九条あり、読み方、学び方、体裁などが示される。続いて、「大成至聖文宣皇帝孔夫子」が八条あり、尊号、孔子の生年、日本の儒学史などが示される。

「凡例附言」には「字策」を用いた読み方も丁寧に示されている。(8)これは本書を使用する初学者への配慮であろう。この他にも、江戸期の『論語』訓蒙書を検討する上で、注目すべき点は存在するが、解釈に関連するものを確認したい。「凡例附言」の冒頭に「〇第一義」として次の記述が見える。

聖人の道とハ、天下国家を治むるよりして、一己の身の行状を修るの道なり。人々日用の教にして、貴賤老幼のまなばでかなはざるものなり。中にも人の上としては元より、ゆるがせにこゝろうべからず。…。（「四書之部」凡例附言、原文に句読点等無し、筆者が補った。以下同じ。）

「聖人の道」とは、上は天下国家を治めるものであり、下は各人の修身の道である。人々の日用の教えであって、身分、年齢の上下なく、学ぶべきものである。

本条に見える「聖人の道」以下の内容は「大学章句序」及び『大学章句』を踏まえる。(9)ただし、朱子学の学習への直接的な言及はなく、学問の第一義を「聖人の道」の学習とする。

続けて、百年のいう「聖人の教」と「四書之部」との関係を次の記述から確認したい。

誠に聖人の教、人々ならふべきことなり。男子はもちろん、女子といへども、位ある方ハ、朝夕左右にあるべし。世に大和小学・女大学など、人の道をやはらげて、重宝の書もあれど、聖人の詞づかひならぬゆへに益なし。その訳は右様のたぐひの書は、手にとればよめやすく、手をはなてば、たちまちわすれやすきなり。今この餘師の法は、学者の読書のごとく、ちくと胸中

にその語をしたゝめて、聖人の詞づかひをよみ覚ゆるがゆへに、仁義の道、心にそみわたるなりとこゝろうべし。（同前）

「聖人の教」は、男子はもちろん、高位の女子も習うべきものである。世に流行する、山崎闇斎『大和小学』、貝原益軒『女大学』などは重宝の書物であるけれども、「聖人の詞づかひ」ではないため、無益である。これらの書物は、読みやすく、忘れやすい。その反面、「四書之部」は、『大和小学』『女大学』とは異なる性格であり、「聖人の詞づかひ」を理解することができるため、仁義の道が心に備わるものである。

前出高井氏は本条を引用し、『余師』を「聖人の言葉使いを覚えることができる」書物とする。しかし、これは改めるべきである。本条に見える『大和小学』『女大学』には闇斎や益軒の言葉が掲載されるに過ぎず、聖人の言葉ではない。それに対し、「四書之部」は聖人の言葉、この場合は経文を掲載し、その学習が可能であることを指すのであろう。

これは「扨、学の法、上にある読法の如く、本文の文字を跡へかへりよむ。是聖人の詞なり」（「四書之部」凡例附言）とするように、本文（経文）を「聖人の詞」とすることからも明らかである。

ここまでは闇斎や益軒を批判するのではなく、その著作『大和小学』『女大学』を批判の対象としていたことを確認した。続いて、江戸期の儒者への言及を確認したい。「凡例附言」には、伊藤仁斎を「其人寛仁の長者にて、めづらしき大儒」、荻生徂徠を「文学武辺に通達し、治乱有用の器量」などと江戸期の儒者を論評する箇所が存在する。[10] このため、一見すると、仁斎の人格、徂徠の学問を評価している。これらは、それぞれ「閑散禄といへる書にくはしければ」、「閑散禄に出したれども」とあるように、南川維遷の『閑散餘録』に基づく評価である。闇斎とその後学たちへの言及は『閑散餘録』を踏まえないように見える。[11] しかし、実際には『閑散餘録』に基づいている。前出高井氏は「凡例附言」に見える江戸期の儒者二五名のうち、二四名が『閑散餘録』と一致することを指摘する。つまり、「凡例附言」は『閑散餘録』に大きく依拠し、江戸期の儒者に言及している。

その一方で「大成至聖文宣皇帝孔夫子」には次の記述も見える。

江都の御政道になりて、惺窩・道春二先生となへ玉ひしより、程朱子の学、天下盛になれり。度會・山崎二

先生は儒にして巫祝の学を兼たり。仁斎先生は古義の一家を立、徂来先生は復古の文章を唱、遂に天下の儒風三品となる。朱子・仁斎・徂来是なり。就中、西山明公は、文武兼玉ひ、聡明叡敏、天朝の真学、その中正の第一なり。其事は天朝の規格を戴き、儒教を羽翼とし、仏も妄に廃し給はざるなり。元来、天朝の道は、大正の規律定則ありて、儒仏を駁ること決して有べからず。公自から称して文学を任とし玉ふ。因て公の学給ふ処、これを天朝の正学とす。専門の儒学は、右の三品なり。近来一家を建るものすくなからず。何も少し斗の識見異なれども、皆三品の末流と知るべし。…。（「四書之部」大成至聖文宣皇帝孔夫子）

藤原惺窩、林羅山により、程朱学が盛んになったことから始まり、度会延佳と山崎闇斎、伊藤仁斎、荻生徂徠の学派に言及し、朱子学、古義学、古文辞学の流行を述べる。続けて、西山明公（徳川光圀）を「天朝の真学、その中正の第一」と評価する。徳川光圀は『閑散餘録』に全く見えないため、百年独自の部分である。

本条には、朱子学、古義学、古文辞学の流行、徳川光圀への思慕が見える。江戸期の学術については、「三品」とし、各学派が並び立ったことを示す。ただし、尊崇する学派は示さず、並列にとどめる。この傾向は「四書之部」にも見える。『大学余師』冒頭には、僅かに「朱ハ氏、熹ハ名なり。宋の世の大儒先生也」とあり、尊崇も窺える。しかし、これ以外には直接的な言及は少ない。続いて、『論語余師』に見える『論語』解釈を検討したい。

## 四、『論語余師』の体裁とその解釈について

『論語余師』の体裁は、上段は経文の書き下し文であり、置き字は○で囲まれ、再読文字は二度読むことが示されることもある。底本、経文の書き下し文、章句の分類は『四書章句集注』（以下、適宜『集注』と略す）に基づく。

下段は経文一行で、和文で割注、注釈には適宜、振り仮名が附される。振り仮名には「大夫」「覇者」「為人」「節文」など和訓が用いられることもある。[12] これらは本書の対象読者である初学者、及び、その使用目的である「自学自習」のために、理解を容易にする配慮であろう。

和訓以外の初学者への配慮としては、「周有八士」章に以下の記述が見える。

周の第三成王の御宇、一人の母八人の賢子を乳たりし例あり。伯仲叔季ハ、天朝の太郎・二郎・三郎・四郎

の如く、兄を伯とし、次を叔とす。…。（『論語余師』微子）

周にいた有能な八人についての章である。『集注』に基づき、一人の母が八人の賢人を産んだとする。続けて、経文に見える伯・仲・叔・季は、日本で言えば、太郎・次郎・三郎・四郎のようなものであり、兄を伯、弟を叔とする。経文の語を日本の文言によって解釈する手法である。

また「力不足者、道而廢」章には以下の記述が見える。

たとへば、関東へ行んに、箱根山辺にて廃なバ、何の益かあらん。中道に廃とは是なり。…。（『論語余師』雍也）

経文の「中道而廢」を、西から関東に行こうとするのに、箱根で止めてしまうことに喩える。ここでは、先ほどの「天朝」はなく、「たとへば」として、日本の地名に置き換えて分かりやすく解釈している。先ほどと同じ解釈手法であり、これも初学者への配慮であろう。

これらは「四書之部」に多く見えるため、特徴的に見える。[13]これらの初学者への配慮から、「平易な解説を加えたもの」とも考えられる。しかし、これらは江戸期『論語』訓蒙書に多く用いられる解釈手法である。[14]そのため、「四書之部」のみの特徴と見なすことはできない。注目すべきは従来より、多く議論となる『論語余師』と『集注』との関係であろう。以下、両書の関係を検討したい。

## （1）『論語集注』に基づく解釈

「巧言令色」章（学而）を取り上げ、『論語余師』と『集注』との関係を確認したい。経文「子曰、巧言令色、鮮矣仁」に次の記述が見える。

巧、好。令、善也。好其言、善其色、致飾於外、務以悅人、則人欲肆而本心之德亡矣。聖人辭不迫切、專言鮮、則絶無可知、學者所當深戒也。○程子曰、知巧言令色之非仁、則知仁矣。（『論語集注』学而）

言を巧にして、へつらひ笑など、顔色を令どる類の人ハ、物を仁めぐむの心、けつして鮮ものなりとの仰なり。鮮矣とハ、聖人寛裕の御詞にして、実になきものなりとの意としるべし。（『論語余師』学而）

右のように両書を並べると、多くの箇所は『集注』に基づくことが分かる。一例を挙げると、『集注』では「聖人の辭、迫切ならず、專ら鮮しと言へば、則ち絶へて無きこと知るべし」と、経文の「鮮」を「絶無」として解釈する。『論語余師』では「鮮矣とは、聖人寛裕の御詞にして、実になきものなり」と「鮮矣」を解釈する。『集注』に基づ

くのは明白である。

しかし、両書には異なる点も存在する。第一は「巧は、好なり。令は、善なり」とする語注の省略である。第二は「程子曰」以下の圏外の説の省略である。これは「巧言令色」章のみではなく、『論語余師』全体でも同様であり、語注は省略され、多くの場合、圏外の説は省略される。[15] また、本章には見えないが、音注も省略される。

本章において、『論語余師』では、『集注』の○印（圏点）以下に引用されている程子のいう「巧言令色が仁でないの理解すれば、仁を理解していると言える」を省略しているのは象徴的である。ここに注目すれば、朱子の本注のみを用い、補説的な注釈は言及せず、省略しているように見える。次にこの問題を検討したい。

## （2）補説的な注釈

ここでは補説的な注釈について「奢則不孫」章（述而）を取り上げ、対比して検討したい。経文「子曰、奢則不孫、儉則固。與其不孫也、寧固」に次の記述が見える。

孫、去聲。○孫、順也。固、陋也。奢儉俱失中。而奢之害大。○晁氏曰、不得已而救時之弊也。（『集注』述而）

凡て奢を為者ハ、物ごと不孫なり。又倹約なる者は極て挙動固しきものなり。何も中庸ならぬ病なり。然ども一方をとるならバ、其不孫身持を為与は、寧より固とも身をひかへる方が勝しと仰せられし。○古人の言行録にも、身の程を知れと仰られ、また上を見なとの仰ありし。世よ是を五字七字の御教と伝へ侍る。則はちこの意なり。（『論語余師』述而）

『集注』では圏点以下に、圏外の説として、晁氏の「やむを得ず、時勢の弊害を救おうとして発言した」を引く。『論語余師』では圏点以下に「古人の言行録」とし、徳川家康の「身の程を知れ」「上を見な」を引用し、これを本章の大意とする。

『論語余師』では『集注』の音注、語注を省略している。また、圏点以下において、『集注』では晁氏のいう、本章の孔子の言は時勢に関係あるとするの説を引き、『論語余師』では異なる「古人の言行録」を引く。

「奢則不孫」章では圏点以下の解釈を『集注』の晁氏の説ではなく、別人の説を用いる。ここでは、圏点以下の補説的な注釈を改めることに留まるが、以下に示すように圏点を用いない注釈にも同様の例は見える。

次は「誦詩三百、授之以政不達」章（子路）を取り上げ、

対比して検討したい。経文「子曰、誦詩三百、授之以政、不達。使於四方、不能専對。雖多、亦奚以為」に次の記述が見える。

使、去聲。専、獨也。詩本人情、該物理、可以驗風俗之盛衰、見政治之得失。其言温厚和平、長於風諭。故誦之者、必達於政而能言也。○程子曰、窮經將以致用也。世之誦詩者、果能從政而專對乎。然則其所學者、章句之末耳、此學者之大患也。（『集注』子路）

此段詩経の徳と并に学問の法、日用の事に行なふべきを論じ玉ふ。それ詩ハ人情に通じ、物の名を知り、世の盛衰、政ごとの得失を見る。その徳ハ、温厚和平ぎ、言語に達すべきなり。然に徒に学て文字を翫弄の輩ハ、仮令詩三百篇尽く誦じたりとも、政務を授かりて、事に達せ不、四方へ君の命を使ても、その意達せず。大節なる事に臨機応変して専対る事能ハざるハ誠に益なしといふべし。しかるときは仮令多く学たりとも、奚以為と仰られし。黄門明公の仰せにも、今時の儒者といふハ、大かた四書五経を講じ、詩文を以て門人を取ことにて、政務に達せず、これ多しといへども、奚以為とのこゝろなりと。（『論語余師』子路）

両書の解釈を見ると、『論語余師』では『詩経』は人情に基づき、物の名称を理解し、世の盛衰や政治の得失を理解できるとしており、『集注』に基づいている。

異なる点としては、『集注』の圏外には、程子の「世の中の学者は政務に従事できるだろうか」とする説を引く。一方、『論語余師』には、黄門明公（徳川光圀）のいう、儒者は四書五経を講じ、詩文によって弟子を取るが、政務には達しないとする説を引き、これを本章の大意とする。[16]

程子と光圀との言は、儒者の政務の従事に関する点が類似するが、当然、別の説である。『論語余師』において『集注』に引く程氏の説を省略し、それを改め、光圀の言を掲載する点は重要である。

ここまで検討したように、『論語余師』には全体を通して、『朱子語類』や『四書或問』などの朱子や朱子学に関連する他の著作からの引用は存在しない。また、江戸初期から中期の『論語』訓蒙書に見える『論語大全』を始めとする明代の『論語』注釈書の影響も存在しない。朱子学に関連する文献では『論語集注』のみを用いている。これから分かるように、『論語余師』は『集注』や朱子学への深い理解を目指して作成された著作ではない。初学者に向けて、『集注』を用い、「聖人の道」の学習を目的とした著作である。ただし、補説的な注釈として、「古人の言行録」や「黄

門明公」なども引用されるため、『集注』を引き写した著作ではない。

『集注』との違いは、「弟子孰爲好學」（先進）章においても明白である。経文「季康子問、弟子孰爲好學。孔子對曰、有顏回者、好學。不幸短命死矣。今也則亡」に次の記述が見える。

好、去聲。○范氏曰、哀公・康子問同而對有詳略者、臣之告君、不可不盡。若康子者、必待其能問乃告之。此敎誨之道也。（『集注』先進）

魯の大夫季康子の問なり。以下まへに説たれば、略しぬ。（『論語余師』先進）

『集注』では、圏外の説に、范氏のいう「哀公と康子とでは質問が同じであるに、その答えに詳略がある理由」に関する説を引く。『論語余師』では、これと異なり、季康子が魯の大夫であることを示し、前に解釈したため、省略する、という。前とは周知のように雍也篇の哀公が「弟子孰爲好學」と問うたことを指す。ただし、どちらの章にも詳略に関する言及はない。本章では理解を深めることを目的としない。

朱子学の学習に関する言説としては、『経典余師　四書序之部』（以下、適宜、「四書序之部」と略す）に次のように見える。

○朱子の学を致んとならば、精義・或問・輯略・全書・語類等を見ずして分明なりがたし。近来ハ兎かく宋学を浅近なるやうに思人多し。学問を深切に学ざる謬誤なり。徂来・仁斎、二氏の如きは又々一家の豪傑にて、是ハ又その所見あることなり。但し博識文章のみにて、儒見の陋は免がたきものなりと、或先生のいひ置しを併しるすものなり。（「四書序之部」中庸章句序）

『論孟精義』『四書或問』以下の読解の重要性を述べ、朱子学は「浅近」なものではないとする。加えて、「或先生の説」とし、仁斎・徂徠を「博識文章のみにて儒見の陋」と、低く評価する言説を載せる。

朱子学の学習に対し、『論語集注』を読解すれば充分とはしない。『論孟精義』以下の重要性を認識していた。つまり、『論語余師』は『集注』に基づく箇所を含むが、朱子学の深い理解を目的としない。「第一義」として掲げる「聖人の道」の学習を目的とする著作である。次に『集注』以外との関連を検討したい。

## （3）江戸期の儒者への言及

『論語余師』では江戸期の儒者の言及が散見される。こ

のため、前述のように、古くは、『論語国字解』では、「往々雑ふるに、本邦大儒、林羅山、熊沢蕃山、木下順庵、伊藤仁斎父子、荻生徂徠等諸家の説を以てしたり」ともされる。ただし、以下に示すように、羅山、順庵、仁斎の説は見えない。ここでは「公山弗擾以費畔」章の後半を取り上げ、対比し、江戸期の儒者への言及を検討したい。

夫、音扶。○豈徒哉、言必用我也。為東周、言興周道於東方。○程子曰、聖人以天下無不可有為之人、亦無不可改過之人、故欲往。然而終不往者、知其必不能改故也。（『集注』陽貨）

聖人御答、さほどにまで公山を棄べきにも及ざるなり。今我を召こと、豈徒づらごとならんや。もし我示ところを用るならバ、吾かの周の徳のさかんなりし如く、徳を東方にひろめんと思ふなりとぞ。凡て聖人の心ハ、国のみだれ、民のくるしみを憂玉ふ。且またいかやうの中にも、道の行はれる時節あるものにて、又過まちを改めぬ人、もろきものゆへに、かく仰せありしなり。先だつて南子にまみへ、今また公山氏へ之と思し玉ふこと、聖人仁心のふかきかく別の義なり。この事等ハ東涯先生、博論の書にものべたり。（『論語余師』陽貨）

『論語余師』では『集注』の「豈に徒ならんやは、必ず我を用ふるを言ふなり」や「東周を為すは、周の道を東方に興さんことを言ふ」に基づく解釈をしている。また、これまでの諸章とは異なり、圏点以下の程子の「聖人、天下爲すこと有るべからざるの人無く、亦た過ちを改むるべからざる人無きを以て、故に往かんと欲す」の説も『論語余師』では少し用いられている。

本章では『集注』に基づき、その内容を分かりやすく説いているとも言える。それに加えて、以前には評判の悪い南子に謁見し、今回は逆臣である公山弗擾のもとに行こうとしたことは、孔子に深い考えがあってのこととする。南子、公山弗擾については、ともに『集注』には見えないため、独自の部分である。さらに、末尾にこの問題は伊藤東涯の『経史博論』にも述べられているとする。(17)

末尾には東涯の説の存在が示される。東涯は本章のみ、仁斎の名は『論語余師』には見えない。前出金氏は『論語余師』には『集注』に加えて、古義学の影響があると論じる。しかし、管見の限りでは、経文の読み方や解釈に仁斎の影響は見えない。その上、東涯の言及は本章に一条、仁斎への言及に至っては存在しない。古義学の影響を論じるのは難しい。また、江戸期の儒者の引用は東涯のみではない。以下に二条を示す。

徂来先生の語にも、それ人の争といふハ、自身の存じよりを信向せざる人に、是非に信向なさしめんとするより起るなりと云々。（『論語余師』八佾「君子無所争」章）

○熊沢先生の曰く、凡て問ほどの人ハ、その人の言を信とするものゆへに、答るものも必ず己が正し明めざることをいふまじきなり。今の僧ハ只仏の名を唱と、身に僧衣を着することばかり。仏法にて天竺の教にもかなはぬことをのべ飾る。儒者の国家に益なきとおなじ。（『論語余師』八佾「哀公問社於宰我章」章）

ここに引用したのは『論語余師』に見える荻生徂徠、熊沢蕃山の言葉であるが、朱子学に対して護教的な姿勢を取るならば、江戸期の儒者より、朱子学者の学説を引用するべきである。

ところが、『論語余師』には、ここに示した伊藤東涯、荻生徂徠、熊沢蕃山がそれぞれ一章存在するほかにも、浅見絅斎（一章、雍也「君子博學於文、約之以禮」章）、室鳩巣（二章、述而「用之則行、舍之則藏」章、陽貨「鄙夫可與事君也與哉」章）も引用される。

以上のように『論語余師』における江戸期の儒者の学説の引用自体は多くない。しかし、特徴的なのは、朱子学、古義学、古文辞学など、一つの学派、学術にはとらわれず、引用していることである。学派にこだわらない背景は次の記述であろう。

学問の要は、中正を執守べくして、偏倚を嫌ことなり。物に本末あり。本を尊とむべし。偏倚の人は、本を忘るゝよしなり。（「四書之部」凡例附言）

本条では学問の要点として、「中正」を守り、「偏倚」することを否定する。これは「物有本末、事有終始。知所先後、則近道矣」などの『大学章句』などを踏まえる。これも朱子の影響である。

また、『論語余師』ではないが、「四書序之部」には次の記述も見える。

程子先生の考へ玉ふハ、この書ハ、御門人の内有若と曽参とこの二かたの御門弟衆の認めし書ならむか。その証拠には此二人のみを子の字を記て称るとて、本邦の徂来氏ハ、琴張原憲二子の作なり。夫ゆへ二子のみ名をしるせしよしなり。しかれども孰が是、孰が非、後世のもの種々の説あり。益なきこと也。先輩のいひしにてよろしきなり。（「四書序之部」論語序説）

『論語』を編纂した人物に関する程子の説に対し、徂徠の琴張・原憲する説を示す。両説を併記するように見える

が、加えて、それらの説の是非を論じことは無益とし、先輩、ここでは程子に従うべきとする。

本条では、両論を併記しつつも朱子学的な解釈を尊重する態度を示す。これは先ほどの「中正」を守り、「偏倚」を否定する態度とも合致する。百年は『集注』を主とする。しかし、それは朱子学と異なる学派を否定する態度にはならない。

## （4）百年の自説について

『論語余師』には、『集注』と大きく異なる百年の自説ともいうべき解釈も存在する。

ここでは、「攻乎異端」章（為政）を取り上げ、百年の自説について検討したい。経文「子曰、攻乎異端、斯害也已」に対して、次の記述が見える。

范氏曰、攻、専治也、故治木石金玉之工曰攻。異端、非聖人之道、而別為一端、如楊墨是也。其率天下至於無父無君、専治而欲精之、為害甚矣。○程子曰、佛氏之言、比之楊墨、尤為近理、所以其害為尤甚。學者當如淫聲美色以遠之、不爾、則駸駸然入於其中矣。（『集注』為政）

都て流儀のちがひたることや。または心だて違たるを異端といふ。端き異なりとの義なり。しかれば互に理を以て攻合たりとも益なきのみならず。却て斯争の害ある而已とぞ。（『論語余師』為政）

『集注』は范氏の説を引き、異端を聖人の道ではなく、別の一端、楊朱や墨翟のような存在とする。これに加え、圏外に、程子の説を引き、仏教の言説は楊朱や墨翟よりも害を為す存在として言及する。

『論語余師』は大きく異なる解釈である。「異端」を「流儀のちがひ」、または「心だて違たる」存在とする。加えて、『集注』で論じられる楊朱や墨翟、さらには、仏教には全く言及しない。[18]

本章における『集注』は本注が「范氏曰」であり、圏外の説が「程子曰」である。このうち、圏外の説を改めることがあるのは確認した。本章の本注に注目すると、朱子ではなく、范氏の説のため、改めていると考えられる。

次に、本章と同様に本注が引用に依拠する場合を「愛之、能勿勞乎」章（憲問）から検討したい。経文「子曰愛之、能勿勞乎。忠焉、能勿誨乎」に次の記述が見える。

蘇氏曰、愛而勿勞、禽犢之愛也。忠而勿誨、婦寺之忠也。愛而知勞之、則其為愛也深矣。忠而知誨之、則其為忠也大矣。（『集注』憲問）

子を愛するにハ、学問を務はげましむ。君に忠ならば、よく諫言を奉つるべし。愛すとならば、苦労のつとめをいたさしむ。忠君を大切に存ゼバ、説こび玉はざるの忠言を奉まつるべしとなり。（『論語余師』憲問）

『集注』に引く蘇氏の説では、愛しても苦労させないのは禽犢（動物）の愛、真心があっても、過ちを正さないのは婦寺（婦人と宦官）の忠とする。

『論語余師』では、子への愛として学問、主君への忠として諫言を挙げ、本章を解釈している。先ほど確認した「攻乎異端」と同様に『集注』とは異なる解釈である。

『集注』の「攻乎異端」章、「愛之、能勿勞乎」章に共通するのは、本注が朱子ではなく、引用に大きく依拠することである。これらの二章に見えるように、『論語余師』では、音注、語注、圏外の説を除き、朱子の注があるときは、その解釈に基づき、朱子ではなく、他者の説に依拠する場合は、百年の自説を交えるのであろう。ただし、それは仁斎や徂徠のような一家の説を立てる態度ではない。

このほか、『論語余師』と『集注』の異なる点に「天朝」の問題がある。この問題は前出高井氏が「天朝思想」と題し、「凡例附言」などを用い、詳しく論じている。[19] 高井氏は百年が「日本は世界諸国の朝廷であり、他の国々の及ぶ所」ではないことを指摘する。百年のこの態度は『論語余師』には、しばしば見える。以下にその代表的な二条を示す。

天朝の中華西夷に上たる事ハ、此に外ならざるを以てなり。（『論語余師』泰伯「其可謂至德也已矣」章）

夫　天朝のみ真に天子の国なり。中華の文物美なりといへども、外国を以て比をなすべからざること論なし。（『論語余師』子罕「子欲居九夷」章）

二条ともに中国のみならず、他国に対しても日本の優位を主張する。これは「四書之部」全体に共通する。これは江戸期の儒者や徳川光圀への評価につながる態度とも考えられる。このため、『論語余師』に朱子以外の江戸期の儒者の言説を引用することも是としたのであろう。

## 五、むすびに代えて

本稿では、江戸期『論語』訓蒙書の一端として、『論語余師』における『論語』解釈を『論語集注』との関係を中心として検討した。

『経典余師　四書之部』の先行研究では、その解釈は、朱熹の注釈に拠るとするもの、江戸期の儒者を交えるとす

るもの、古義学、陽明学の影響と種々に論じられていた。「凡例附言」では「聖人の道」「聖人の教」の学習が強調される。これは『大学章句』を踏まえるが、朱子学への言及はない。ほかにも、江戸期の学術に言及し、各学派が並び立ったことを示す。これに対して、尊崇する学派は示さず、並列にとどめている。

『論語余師』には『論語集注』に基づく解釈が多い。ただし、それは「此書の註解は総て朱註に拠」ることを意味しない。朱子の本注は用いられるが、音注や語注、加えて、多くの場合、圏外の説も省略される。

また、『朱子語類』や『四書或問』などの朱子の他の著作からの引用は存在しない。さらに、江戸初期から中期の『論語』訓蒙書に見える『論語大全』を始めとする明代の『論語』注釈書の影響も存在しない。『論語余師』では、朱子の著作としては『論語集注』のみが用いられる。

その一方で、「四書序之部」では朱子学の学習における『論孟精義』『四書或問』等の重要性が言及される。しかし、それらを用いて、解釈は行わない。つまり、『論語余師』は朱子学の深い理解を目指して作成された著作ではない。初学者に向けて、『論語集注』を用い、「聖人の道」の学習を目的とした著作である。ただし、江戸期の儒者の引用や、しばしば見える初学者への配慮も含めて、『論語集注』を引き写した著作などではない。これは『論語集注』において、他者の説に大きく依拠する場合には百年の自説によって解釈することからも明らかである。

江戸期の儒者は、東涯、徂徠、蕃山など学派にこだわらず、言及している。この背景は百年のいう「中正」を守り、「偏倚」を否定する態度であろう。ただし、江戸期の儒者の問題は日本が諸外国に比べて優れるという考えに基づく点も考慮する必要がある。

本稿は『論語集注』の関係を主としたため、江戸期『論語』訓蒙書における『論語余師』の位置づけ、他の『論語』訓蒙書との解釈手法の異同、さらには『論語余師』以外の一連の『経典余師』の関係などにも言及できなかった。全て今後の課題としたい。

## 注

（1）江戸期の『論語』訓蒙書については、『國學院大學大学院特定課題研究 江戸期『論語』訓蒙書の研究—第一集』（國學院大學大学院、二〇一九）、『同 第二集』（國學院大學大学院、二〇二〇）、拙稿「毛利貞斎『重改論語集註俚諺鈔』について—引用諸註を中心として」（『日本儒教学会報』第四号、二〇二〇）、石本道明

「中村惕斎『論語示蒙句解』小考—学問は人格の陶冶のために—」（『新しい漢文学教育』第六九号、二〇一九）参照。

（2）『江戸の読書熱—自学する読者と書籍流通』第三章「『経典余師』というモデル」（平凡社選書、二〇〇七）参照。

（3）「序にかえて—〈師匠いらず〉の〈独り学問〉を広めた「経典余師」—」（『経典余詩師集成』所収、大空社、二〇〇九）

（4）『経典余師』への言及は高橋敏『江戸の教育力』（ちくま新書、二〇〇七年）もある。また、井上泰至氏は、『余師』を「儒教解説書」とし、「平易な解説を加えたものであり、十九世紀の庶民のベストセラーであった。寺子屋の師匠のマニュアルでもあり、自学自習者のテキストとしても読まれた」（『日本思想史事典』所収「江戸後期の庶民文化」、丸善出版社、二〇二〇）とする。

（5）『溪百年とその思想—安藤昌益との一致—』（三宅正彦『安藤昌益の思想史的研究』所収、岩田書院、二〇〇一）同論文は、溪百年の生涯、著作、先行研究、思想を詳述する。このうち、溪百年の生涯は、安居總子氏「江戸期における漢文教育四、五—溪百年と『経典余師』（一）（二）（『新しい漢字漢文教育』第六七、六八号、全国漢文教育学会、二〇一八、二〇一九）、同氏「溪百年と『経典余師』」（『講座近代日本と漢学』第二巻「漢学と漢学塾」所収、戎光祥出版、二〇二〇）もある。

（6）「庶民經學到天朝正學 以溪百年《經典餘師·四書》爲考察核心」（『嶺南學報』復刊號（第一、二輯合刊、二〇一五）

（7）「宋明儒学の受容」（『日本思想史事典』、丸善出版社、二〇二〇）

（8）「四書之部」凡例附言「さて字策を以て文字をつき、一字の訓よみ終るまでは、字をつきてうごくべからず。たとへば、其とよむうちは、其の字をつき、差とよみ出す時に、差の字へうつるべし。是読書の法なり。必ずたがへあやまる事なかれ。」

（9）『大学章句』「古之欲明明德於天下者、先治其國。欲治其國者、先齊其家。欲齊其家者、先脩其身。…。」、大学章句序「則又皆本之人君躬行心得之餘，不待求之民生日用彝倫之外、是以當世之人無不學」

（10）「四書之部」凡例附言「古義学は伊藤仁斎先生よりおこる。其人寛仁の長者にて、めづらしき大儒なり。閑散禄といへる書にくはしけれバこゝに略しぬ。」同「古文字学は徂来先生の学なり。世に天朝の一人なりといふ。文学武辺に通達し、治乱有用の器量なりとぞ、閑散禄に出したれども、其徳の高ことを是非におとしたるハ惜ことなり。かやうの人は儒見にてみるべからざるなりと伝ふ」

（11）「四書之部」凡例附言「度會、山崎、浅見、井沢の諸君子は、ともに宋学の人々なれども、例の巫祝神道の事にそみしかたゞ〳〵なり」

（12）これらは「凡例附言」の「○読法よみかたなり」などにも詳

しい。

（13）『論語余師』八佾「哀公問社於宰我」章「哀公社の義を御門人宰我に問玉ふ。社の義ハ、古へ土地に功徳ある人を其処に祭る。天朝の鎮守産土氏神等なり。…」

（14）この問題は注（1）前出の拙稿において論じた。

（15）『論語余師』泰伯「學如不及」章「学問の道の専要なり。…。若明日を待てとの詞は甚悪き事なりと、程子先生の給ひし。」

（16）光圀への言及は、『論語余師』為政「何爲則民服」章に「…。人を敬まひて言すくなく、権威の人や婦人のものに愛相なきほどの者は多くは正直なる者也と。黄門明公の仰られし」とするように他箇所にも引用が見える。

（17）東涯の議論は『経史博論』巻三「子見南子論」に見える。

（18）百年は仏教を排撃するような態度を取ることはない。注（5）に示した高井氏の論文に仏教との関係への言及がある。

（19）「天朝」については、注（6）に示した金氏の論文でも言及があり、水戸学の影響とするが首肯し難い。

〔キーワード〕経典余師　論語余師　論語集注　渓百年　訓蒙